

🌸「ハーバルオイル美容法」の勧め

p1で述べた様に、本「ベリテ化粧品」は、ハーブオイルと精油類（p8）の併用を前提にした「ハーバルオイル美容法」をコア・ケアとしています。この理由は、合成クリームの歴史から見ても明らかです。

実は、こうしたオイル美容は、日本でも明治以前は極く普通で、その代表が椿・紫根・弟切草・薔薇油等による髪やお肌の手入れでした。

然し、明治初頭、石鹼ベースのクリームが資生堂によって初めて作られ、合成クリームによる美容法が始まりました。その後、第二次大戦中ドイツで開発された合成洗剤技術は、戦後、米国の大手化学会社P&G社等によってクリーム製造用乳化技術に転用され、現在の多種多様の「乳液系化粧品」の原型が造られました。

これらは、基本的に鉱物油（ミネラルオイル）を基材にし、合成乳化剤と合成香料等の石油系化学原料とが高濃度に使用されていたため「リール黒皮症」等の化粧品薬害が多発したのは記憶に新しい所です。

こうした事態の反動から、昭和60年代以降、「ハーブ・自然」を標榜し、鉱物油の代わりに植物油を用い、合成抽出剤（PG, BG）による各種ハーブエキスを配合した所謂「自然派化粧品」がN社、A社等を中心に売り出され、一定に市場に定着しました。

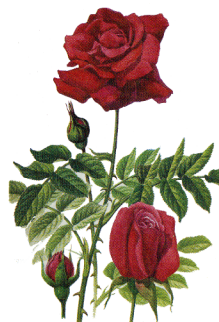
平成以降になると、従来型の合成クリーム・乳液の代わりに、シリコン・アクリル系の合成樹脂をコポリマーという新型の高分子乳化剤でゲル状にしたジェル系化粧品が登場し現在、基礎化粧品の主流となりつつあります。これらに共通するのは、「これ一品で全て間に合います」とか「即、お肌に張りが出ます」と云う謳い文句です。

問題は、これらは、以前の合成クリーム・乳液と外観、利便性は異なりますが、「合成界面活性剤+化学物質」の基本は全く変わりなく、むしろ作用が強まっているという点です。

確かに、近年は、かつてのリール黒皮症の様な、一見明らかに化粧品薬害とわかる1次的皮膚障害は少なくなりましたが、その代わり、強力な新型界面活性剤の皮膚深層・体内浸透による潜在化した「**2次的内臓系薬害**」が懸念されています。

こうした新たな複合化粧品薬害を防ぎ、真の美容法を確立するには、全ての合成界面活性剤を一切排除し、その他石油系化学原料も可能な限り使用しない事以外ありません。

その第一歩は、「**伝統的なハーブオイル美容法の見直しと実践**」から始まります。



● ハーバル・ベーシックオイルライン ベーシックオイル



紫外線防止・抗酸化力の強いオリザ（米胚芽）皮膚浸透性に優れたホホバ、ナリッシング効果のマロニエ、マッサージタッチの良いマカデミアンオイル配合の多目的高級美容オイル。

- ・過敏・乾燥肌用のクレンジングに。
- ・乳液クリーム替りのナリッシングに。
- ・芳香オイルマッサージのベース&精油希釈（キャリアー）に。（その優れた抗酸化力は、添加精油のオイル酸化を防止し、無臭なので、精油の芳香性を妨げません。）



130ml：¥5,600、R：¥5,300、M 5ml：¥210 「全成分」ホホバ油、米胚芽油、マカデミアン油、マロニエ油、ヒマワリ油